

## 玉音放送直後の国民の意識

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川島, 高峰 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/11705">http://hdl.handle.net/10291/11705</a>

## 玉音放送直後の国民の意識

### An Examination of Japanese Public Sentiments to the “Imperial Radio Announcement of Surrender” (Gyokuon Hoso) at the End of WWII

博士前期課程 政治学専攻62年入学

川 島 高 峰

TAKANE KAWASHIMA

#### はじめに

昭和20年8月15日、日本の国民は玉音放送により、日本が降伏したことを始めて知らされた。この敗戦が国民に与えた衝撃は、「長い間、『あの日』というだけで幅広い年齢階層のあいだでつうじるほどの重み<sup>1)</sup>」を持っていた。この『あの日』における一般の国民の意識については従来、残念、虚脱、安堵といったごく大まかなことしか言われてきていない。しかも、『あの日』から40数年が経過し今日では敗戦体験のない世代が敗戦体験のある世代を数の上ではるかに上回りつつある。こうした中、敗戦論<sup>2)</sup>、無条件降伏論争<sup>3)</sup>といった議論ばかりが先行し、ともすると敗戦直後の一般の国民の実像が見失われがちである。そこで、この戦後の原点をもう一度、実像として把握しておくことが重要なのではないかと思う。なおここで主に対象とするのは銃後にいた一般の国民の敗戦体験であり、一般とは戦争指導層に対し指導される側の立場を示すことにする。また、対象とする期間を政治犯が釈放された10月10日迄としている。

#### 1. 戦争末期の国民意識

敗戦直後に一般の国民が示した態度、言動の諸傾向は、その殆どが戦争末期の国民の意識に端を発している。戦争末期の国民意識の動向についてはアメリカ戦略爆撃調査団が昭和20年10月から12月にかけて約5000人の日本人に面接による意識調査<sup>4)</sup>を行っており、その調査報告を手掛りとして考えてゆこうと思う。

報告書で特に参考となるのが「〔報告書第14号〕戦略爆撃が日本人の戦意におよぼした効果」である。ここで戦意の意味を「日本人がその指導者にしたがい戦争に勝つために労働し、犠牲となろうとする意欲と能力を示す諸要因を総合したものを簡単に表わした言葉<sup>5)</sup>」と定義している。このように日本人の戦意を戦争遂行に対する意欲と能力の合わさったものとして捕えている点にこの報告書の特徴がある。同報告書をもとに戦争末期における日本人の戦意の低下について概述すると次のようにな

る。

戦意の低下は食糧事情と戦況の悪化の2つを要因としている。食糧事情について例えば主食の米を見ても、米の配給制は既に開戦の前（1941年4月）に始められていたが、その翌年には麦を混入することが必要となり終戦の年には配給米の麦、ジャガイモ等の混入率は20%に達していた<sup>87</sup>。しかも配給量は減少しその実施も遅れがちとなっていた。食糧事情の悪化により人々は慢性的な栄養失調や空腹感に陥り労働意欲や能率が低下した。

しかし、このような食糧事情の悪化にもかかわらず、戦意の低下を最も強く加速したのが、“サイパン玉砕”に始る相次ぐ日本軍敗退の報道と本土空襲の本格化である。（図1<sup>79</sup>、図2<sup>80</sup>を参照）このように戦争が末期となるに従い国民の間で勝利への信念は急速に失われていった。そして、それと共に戦争の継続を欲しない気持が増大していった。（図3を参照）<sup>89</sup>これにもかかわらず、彼らの戦意が維持されたのは次の2つの要因のためである。一つは『精神』力と国の不敗とに対する信念」並びに「天皇への服従と忠節」という半ば信仰化した気持である。そして、もう一つが「敗戦の結果に対する恐怖」、「戦争に関する情報の抹殺」<sup>90</sup>といった国民の判断を歪めさせていた諸要因である。

戦争末期には厭戦気分すら台頭していたのであるが、それでも「天皇の降伏宣言に対する圧倒的多数の反応は、悲しみ、みじめさ、驚き、そして幻滅のいずれか」<sup>11</sup>であった。敗戦を予期していたものですら『あの日』の「感情的打撃」から免れることができなかった。このことは『精神』力と国の不敗とに対する信念」と「天皇への服従と忠節」とが戦意を支えた要因として、いかに大きな比重を占めていたかを示している。「戦争中、あなたは戦争遂行上日本の最も大きな力は何であると思われましたか」という質問に対する回答は下記のような結果<sup>12</sup>であった。

第一表 日本の最も大きな力

精神的事項（大和魂、犠牲的精神、戦闘精神等）	44%
神風特攻隊	7%
物質的事項——資源、産業、科学的知識、軍事力	12%
軍事的並びに政治的指導者に対する信頼	1%
上司に対する服従	1%
日本は強い点を持たなかった	7%
分からない	20%
その他	3%
無回答	5%
合計	100%

“日本の強み”として「精神的事項」と「神風特攻隊」を挙げた者との両者の発想の根拠をほぼ同等のものと判断したとするならば、全体の51%が“日本精神”に日本の強みを見出していたと言える。この“日本精神”について、応答者はしばしば“大和魂”という言葉を口にしており、その意味を問われ次の様に答えている。「日本の武士は、まあ、一度も戦争に負けたことなく……。〔問：それに。〕いざとなればですね、自分の腹を切っても、この主にむくいるという、その気持です。」<sup>13</sup>と

し、主とは誰かと問われ、天皇陛下と答えている。ある者は、「いくらあの外人がなんだかだといっても、その葉隠的な武士道で、肉弾で体あたりして、絶対……という、なんだか、いまから考えると盲目的信念ですが……。」<sup>14)</sup> “大和魂”という言葉を用いない人でも「天皇陛下にたいしてまつりですね、無二の忠節、国民の愛国心と、団結、団結そのものは精神力ですね。それだけです。」<sup>15)</sup> とほぼ同様のことを答えている。先に見た様に戦争末期の国民の大多数は、情勢として日本に勝ち目がないと感じながらも、気持としてはなんとかして日本に勝って欲しいと非常に強く思っていたのである。このような勝利への強い願望は「出雲大社ノ松ノ木ニ桜ガ咲ヒタ、日露戦争ノ際モノノ様ナ桜ガ咲ヒテ日本ガ勝ツタカラ大東亞戦争モ九月迄ニ日本ガ勝ツテ戦争ハ終ル」<sup>16)</sup> とか、神風が吹く、といった“希望的流言”を多数生みだすようになる。しかもこの願望は「天皇への服従と忠節」の下にある限りは全く不動なものなのであった。このことは国民の勝利への希望、不敗への信念を完全に断ち切ったものが、結局、天皇による降伏宣言であったということを指摘すれば充分であろう。敗戦直後においても国民の大多数は天皇（制）の存続を支持している。

第二表 天皇に対する態度 (注)<sup>17)</sup>

天皇を存続せよ	69%
どちらでもかまわない	4%
そんな高級な問題を議論することはできない	12%
廃止せよ	3%
無回答	12%
合計	100%

(注) 応答者に対しては「あなたの意見では将来日本にどんな変化が起こるでしょうか」と尋ねられた。この質問に対する返事に続いて「そして天皇についてはどうですか」と尋ねられた。

また、当時の日本人には敗戦、終戦という観念がなかった。ある女性は8月15日の印象を「それは戦争も『やめられる』ものであったのかという発見であった。私には戦争というものが永久につづく冬のような天然現象であり、人間の力ではやめられないもののような気がしていたのだ。」<sup>18)</sup>と記している。戦争の終結は勝利か滅亡以外にはありえなかったのである。

次に「戦争に関する情報の抹殺」を見てみる。一般に抹殺の対象とされた情報は戦況と戦力の実体の2つである。戦況の悪化はサイパン以降覆い隠し難いものとなっていた。これ以前の軍事的敗退について大本営は、例えばガダルカナルからの撤退を「転進」と伝え、海軍の機動部隊が懐滅的打撃を受けたミッドウェー海戦については全く報道させなかったのである。大本営は大きな戦闘の度がそれが「天王山」であることを国民に対し主張していた。しかし、そのような「天王山」の戦闘が、サイパン、グアム、レイテ、そして硫黄島から沖縄へと、段々と本土に近づいて来るのであるから、「いかに愚鈍な人間でも」「戦争に負けられないなどということがありえない」<sup>19)</sup>ことがわかったのである。

しかし、戦況の悪化が絶望的となっていくに従い、一般国民のアメリカに対する憎悪と敗戦の結果に対する恐怖は増大していった。これらの意識の育生は日本の当局側の宣伝により吹きこまれたものである。アメリカ人は「残酷で、野蛮で、兇悪で、憎むべき、加虐傾向のある、利己的な“敵”であ

る』<sup>20)</sup>と信じられていた。アメリカに対する憎悪は特に戦争で肉親を失なったり、空襲で罹災や負傷をした人々の間でほど激しかったようである。広島のある病院では敗戦の報を伝えられ、「病院は、上も下も喧々囂々全く処置なき興奮状態に陥った。日ごろ平和論者であった者も、戦争に厭ききっていた者も、すべて被爆このかた俄然豹変して徹底的な抗戦論者になっている。そこへ降伏ときたのだから、おさまるはずがない。』<sup>21)</sup>としている。他の空襲の激しかった地域や戦死者の遺族の間でもこれと同様なことが起っていたと考えられる。「戦時中、アメリカ人をどう思ったか」という質問に対しては、「回答を拒んだり、その質問をさえぎったりする傾向があったにもかかわらず、40%のものが、憎悪、憤怒、または軽侮」を示し、「征服者を怒らせまいとする希望があったにもかかわらず、わずか11%のものが米国人に対して悪い感情を持たなかった』<sup>22)</sup>と答えている。

戦争の末期には敗戦の結果に対して恐怖心をつのらせるような噂や流言がとびかった。敗戦の結果に関し当時言われていたことを、先の尋問調査の応答の中から幾つか例を挙げてみると、「もうよからぬ牢へでも、千人くらいかためて入れられて、……石油でもかけられて、……そういう悪いことばかり考えてましたね。……悲惨なことばかり……残酷に考えてましたね。』<sup>23)</sup>「すべての日本人は、男子は去勢をするとか、うーん、植民地にして、みなミックス（混血）にしてしまうと。』<sup>24)</sup>「強姦はもう勝手にやられて、もうわれわれも、ほとんど生きてはいられない』<sup>25)</sup>といったように、大体、虐殺、略奪、去勢、強姦、奴隷化といったことが大多数の国民によって信じられていたのである。

第三表 敗戦の場合の予想<sup>26)</sup>

残虐行為、飢餓、奴隷化、全滅	68%
どんなことが起こるか知らなかった	10%
敗戦を予期しなかった	9%
よい取り扱い	4%
その他の種々な結果	5%
無回答	4%
合計	100%

日本の戦力の実体について国民は正確なことを知らされていなかった。大本営は日本の損害については「軽微」「僅少」といった抽象的な表現で、しかも過少にしか発表しなかった。その反対にアメリカの損害は「途方もない程過大」に発表されていた。勿論、ほとんどの国民は戦況の悪化の中で日米の戦力の差を実感することができたはずである。しかし、大本営は戦力は本土決戦のために温存していると国民に対し主張していた。結局、国民が戦力の実体について具体的な数値を知るようになったのは、戦後、東久邇宮内閣により「敗戦の原因と実相」についての発表がなされてからである。この発表がなされるまではかなり多くの人々が戦力の温存を信じていた。

戦時中、生活物質の流通は殆ど配給制の下におかれた。しかし、食糧の配給は常に不足であり、このため“闇”による不正な物質の取引が統制経済の裏側で横行していたのである。例えば、労働者の間で“闇腹”という「満腹」を“配給腹”という「空腹」を意味していた。また、婦人の間で“提灯を持って行く”という「闇で買物をする」ことを意味していた。この外、“闇”を意味する

隠語とし“朧月夜”“燈火管制”“国民公定”“マルヤ㊦”といった言葉が一般の国民の間では公然と使用されていた<sup>27)</sup>。しかし、“闇”の物質は法外な価格で取引されていたため、殆どの国民は“配給腹”の不足を“闇”で補うことができなかった。

こうした生活状況の中で人々の気分は殺伐としたものとなってゆき、礼義とか公共心を守ろうとする心の余裕が失われていった。先の尋問調査でもこの態度の変化を次の様に語っている。「配給なんかも、なにしろ自分だけ余計にとろうと思って、隣組なんていってますが、なかなかうまいふうにいかないんですが。(問、そのほか)それから金のある方へ、金のある方へ、日本人みんなが走っていくということですね。』<sup>28)</sup>「みんな親切がなくなったということですね。男の人が女の人をつきとばして電車に乗ることなんか平気でしたから。』<sup>29)</sup>「自己主義になっちゃうのかなあと、自分さえよければいいというような感じがしましたね。』<sup>30)</sup>

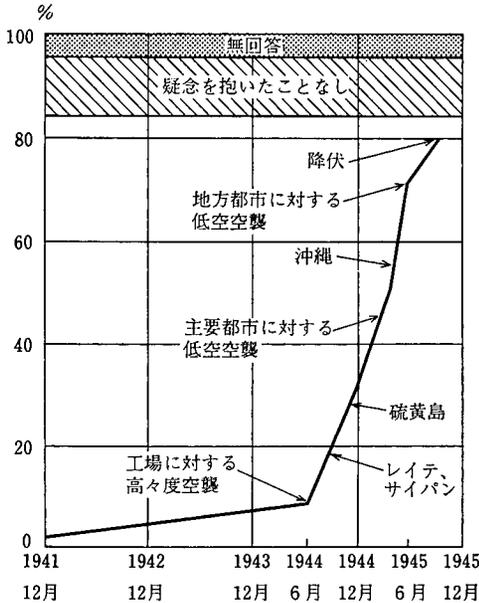
第四表 戦争に対する国民態度の変化<sup>31)</sup>

団結の気持ちの減少——緊張、利己主義、粗暴、争闘など	44%
変化なし	30%
協力の増大	11%
分からない	4%
無回答	11%
合計	100%

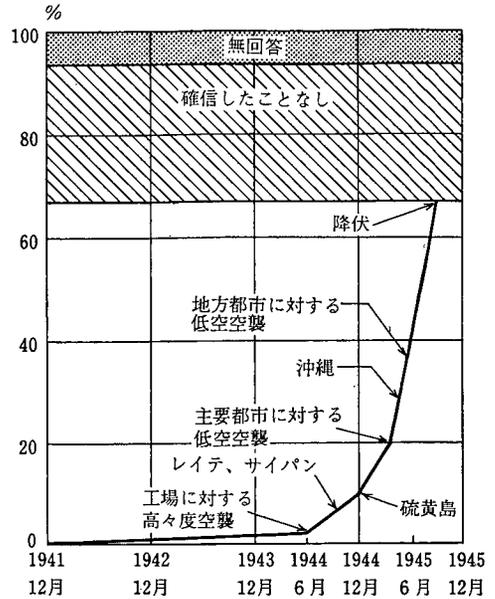
一般に国民の生活は逼迫していたが、日本人の誰もがこのような苦しみに直面していたわけではない。「より富裕で、より勢力のある階級のもの」は、供出物質の横流しや法外に高い闇物資の購入により、一般の国民より「ずっと楽」をしていたのである。尋問調査の応答者のうち40%以上の人がこの“苦しみの不平等”を訴えている<sup>32)</sup>。この配給の不正を戦中の庶民層は“白まはり”(配給物質が上層にのみまわり下層の国民に行き渡らぬこと)、“握り込み”(配給品の取扱者が他人の分まで横取りすること)といった隠語<sup>33)</sup>で表現していた。あるいはその手紙の中で「配給品以外は法外な闇値でなくては手に入らず、貧乏人が病気になったら、死ぬより外に途はありません。』<sup>34)</sup>「東京の話(東京でいかに闇がすごいかということ)をしても知らない人は仲々本当とは思わぬ様です。尤も金があるって闇のできる人は余り痛痒を感じて居ない様です。』<sup>35)</sup>と記している。戦時中は不平を表だて言うことが出来なかったのである。

アメリカ戦略爆撃調査団の報告を手掛りとして戦争末期の一般の国民意識を見てきたがここでこの報告書の問題点について述べておく必要がある。それは同報告書の目的が「戦略爆撃が日本人の戦意に及ぼした効果」を見ることにあったという点である。空襲は勿論、日本全土の都市に及んでいるが、それでもやはり、空襲を受けなかった地域もかなりある。むしろ、空襲は都市や主要な軍需施設に限られたのであるから、空襲のなかった地域と人々の方が多かったと言えよう。この点について報告書は、「爆撃された人々は、総じて爆撃されなかった人々よりも戦意が低い傾向を示した。』<sup>36)</sup>とし、空襲の有無による戦意の低下に地域差のあったことを認めている。しかし、その結語には「爆撃の効果はいちじるしく一様に広まっていた。効果は特定のではなく普遍的であり、目標地域だけに限定さ

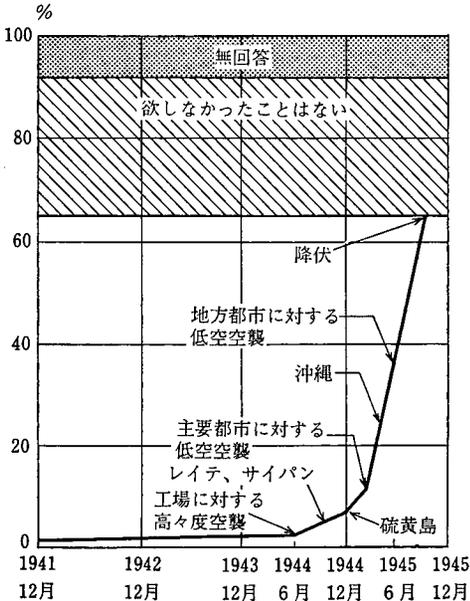
第一図 勝利についての疑念の増大<sup>7)</sup>



第二図 日本は勝てないとの確信の増加<sup>8)</sup>



第三図 戦争継続を欲しない気持ちの増加<sup>9)</sup>



れてはなかった。』<sup>37)</sup>としているのである。しかし、日本の治安当局側による敗戦直後の民心の動向の調査を見ると、先の調査の結論とは多少の喰い違いを示している。

例えば取鳥県からは、「管下ハ空襲被害モ無ク戦意ハ正ニ頂点ニ達シタル感アリ。従ツテ終戦大詔ノ真意ヲ諒解セズ殆ンド謀略ニ依ル終戦或ハ作戦上ノ停戦ナリト信ジ居リタリ。』<sup>38)</sup>と報告している。また、島根県からの報告においても「県民ハ未ダ一度ノ戦災ヲモ蒙ルコトナク疲弊セリトハ謂ヒ乍ラ所謂無疵ニ終レル関係上、敗戦ノ現実感ニ撤シ切ラズ。怎ウシテモ負ケタトハ思ハレナイト言フガ如キハ此ノ間ノ事情ヲ卒直ニ物語ルモノナリ。』<sup>39)</sup>とある。このように空襲のなかった地域では「敗戦感ニ撤シナイ」気持ちが強かったと考えられる。一般に空襲のない地域というのは山間部や

工場のない農村部であり、これらの地方では食料の自給自足が可能であり、大都市で見られた程の食糧不足や“闇”の横行はなかった。“苦しみの不平等”には地域差もあったのである。

また、同報告書が戦争中の国民意識を敗戦後に行った面接調査から導出している点も一考を要す。この調査が行われた時点では敗戦の実感が国民意識に定着しており、彼らの回答が必ずしも戦中の意

識を正確に反映しているとは思えない。むしろ、そこには戦後の敗戦感が反映されていると見た方がよい。従って、同報告書のいう戦意の低下もその程度は多少割引いて見た方が妥当であろう。このようなズレを生んだもう一つの要因が報告書の戦意の定義であろう。戦時中、戦力の不足は精神力で捉い得るとしていた日本人の戦意は、“能力と意欲”の合わさったものというアメリカ人的な見方で捕えていくには多少の無理があると言える。日本人にとって戦意は戦争遂行に関する能力の低下や、戦況の悪化とは無関係に成立していたようである。

これまで述べてきた戦争末期の国民の意識をここでまとめると次のようになる。国民のほとんどは戦況の悪化により日本の勝利が絶望的であると感じていた。このため、国民全体として戦意が著しく低下した。とりわけ、空襲の激しかった大都市部では、食糧事情の悪化は深刻な事態にあった。その一方で“闇”や“横流し”といった物流の不正は半ば公然化し、人々は相互不信に陥り気持は荒んでいった。しかしながら、戦争の終結は勝利か滅亡以外にはありえなかった。この本土決戦を覚悟していた彼らの心情は、戦意が「高い」「低い」というよりは、悲愴なものであったと言う方が適切であろう。大都市と違い山間部や農村部では戦況の悪化を情報として知ることにはあっても、それを身近なものとして実感することはなかった。

こうして、人々は8月15日を迎える。

## 2. 玉音放送当日の経過と国民の反応

8月15日の正午に重大放送があるという予告は、既にその前日からラジオを通じ国民に知らされていた。そして、玉音放送当日の午前中になり、この日の放送で天皇陛下が直々にマイクの前に立ち国民に向かって話をする、ということが初めて明らかにされた。戦時中、政府は公式な声明の発表の手段として、度々、この重大放送をおこなってきた。しかし、天皇陛下自らがマイクの前に立つということは全く前例がなく、玉音放送当日のこの告知により国民は今回の重大放送が今まで行われてきたものとは異なる特別なものであることを知るのであった。

人々は玉音放送を自宅で聞いたり、あるいは、一ヶ所に集まって来て聞いたりした。「集まって来た」というのは、ラジオを持たぬものや、ラジオを空襲で失なった者がたくさんいたし、職場や工場、あるいは学校で8月15日の正午を向えた人がたくさんいたからである。放送はまず、アナウンサーの前置が入り少し間をおいてから天皇の詔書を読み上げる声が続いた。人々は天皇の声が流れるラジオに対し、直立不動で、あるいはひざまずき、その頭を垂れて、雑音まじりの“玉音”に全神経を集中させて聞きいていた。その様は、ちょうど戦時中、陛下の御真影に対しおこなわれていた作法と似ている。職場や学校では放送の開始と共に号令がかかり、人々は一斉に身を固くして玉音に対する“作法”をおこなっていた。しかし、これはなにも強制されなくとも当時の日本人にとって、天皇の肉声に対しこのような作法をとるのは自然な振る舞いであった。

“玉音”はとても聞きとりにくいものであったが、それはラジオの雑音のせいばかりではない。これについて、玉音放送の当日、日本にいたフランス人ロベール・ギランはその手記にこう記している。

「皆（日本人）驚く。ほとんど何もわからなかったからだ！天皇は、天子のみが使う特別な荘重なお言葉で語られたのだ。」とし、その“お言葉”を、「古い、そしてまるで中国語のような」「庶民の言葉とはほとんど共通点のない」<sup>40)</sup>と形容している。そして、天皇の“お言葉”が終ると、「奇妙な話だが、その直後に、天皇が語られたことをわかりやすい言葉に翻訳する、公式のアナウンサーの声が入る必要があったのだ。」と記している<sup>41)</sup>。実際は、細かい内容はともかく、日本が負けたということ位はなんとか理解できたようである。こうして、放送が終ると、嗚咽やすすり泣く声で重苦しい雰囲気あたりはつつまれていった。

以上が多くの手記に語られた玉音放送当日の一般の国民の情景を要約したものである。日本全国の津々浦々ではほこれと同じような光景が展開していたのであった。

ほとんどの国民はこの玉音放送で陛下自身による戦争への最後の御決意か、あるいはソ連に対する宣戦布告がなされるものと思っていた。当時、国民の間では「天皇が徹底抗戦への激しい呼びかけをなさる」<sup>42)</sup>という流言があったくらいである。突然の降伏宣言を俄には信じれず茫然とする者が多数いた。治安当局側の報告にも「民心の約七割は、陛下の重大放送は戦争遂行の最後の決意を御放送あるものとの期待を持せる処、其結果は和平、戦争終結となりしを以て茫然落胆悲憤慷慨する者等各所に散見せらる。」（大阪府）<sup>42)</sup>、「一般県民ハ抗戦ト思ツテキタ者多ク昨日ノ発表ニテ一時茫然自失ノ態。」（神奈川県）<sup>43)</sup>、「県民ハ真ニ茫然自失悲憤慷慨其ノ極ニ達シ徹底抗戦ヲ叫ブモノ、詔書必謹ヲ唱フル者等全ク名状スベカラザル状況ニアリ。」（栃木県）<sup>44)</sup>といったように降伏宣言直後の国民の混乱ぶりを伝えている。敗戦・降伏という事態に対し当時の日本人が全体としてどのような気持を抱いていたかについては、先のアメリカ戦略爆調査団が下記のような調査結果を出している。

降伏直後の国民の反応は第5表で示したとおりであるが、「二つ以上の反応を示した人」もいたと注にあるように、その気持は複雑なものであったと言える。放送直後の反応には勿論、茫然自失、落胆、安堵、不安といったその受け止め方に個人差はある。しかし、表で示された様々な反応はその殆どが恐らくは当時の日本人の気持に当てはまるものであろう。人々は驚き、悲しみ、恥ずかしくなり、それでもやはりホッとしたのである。彼らは戦意を喪失し虚脱状態に陥り、不安感に駆られ悲観的

第五表 降伏直後の反応<sup>45)</sup>

後悔・悲嘆・残念	30%
驚き・衝撃・困惑	23%
戦争が終り、苦しみも終りだという安堵感または幸福感	22%
占領下の扱に対する危惧・心配	13%
幻滅・苦しさ・空虚感、勝利のためにすべてを犠牲にしたが、すべて無駄だった	13%
恥ずかしさとそれに続く安心感、後悔しながらも受容、予想されたが、国史上における汚点と感じる	10%
予期していた、こうなるとはわかっていたとの観念	4%
天皇陛下のことが心配、天皇陛下に恥ずかしい、天皇陛下に申し訳ない	4%
回答なし、またはその他の反応	6%
合計	125%

（注）二つ以上の反応を示した人もいたため、百分率は100%以上となっている。

となっていった。

安堵と落胆というのも当時の日本人にとっては、敗戦に対する反応として表裏一体の気持であったと言える。これについて、「一般民心の動向は一口に言へば『残念だ、併しほつとした』と云ふ所であるが、此のほつとした気持は妻君連中に最も強し。」(群馬県)<sup>46)</sup>という治安当局側の報告がある。ここで安堵感が「妻君連中に最も強し」とあるが、これは夫や子供がいつ兵隊に取られるかという不安からの解放であり、既に徴兵されている場合は「これでやっと帰ってくる」という安堵感の表れでもある。戦争末期には軍人は「消耗品」、少年航空兵は「人生二十五年」<sup>47)</sup>という隠語で呼ばれていた位であり、徴兵忌避は全国的な民心の傾向であった。このような「妻君連中」とは一般に全く反対の反応を示したのが、戦時中、「少国民」と呼ばれ物心のついた頃からその成長を、日本が軍国主義化していく過程のもとで経てきた少年少女達の層である。戦前の偏向した教育を徹底的に吹き込まれていたこれらの世代は、単に敗戦に落胆するにとどまらず、「敗戦の報に安堵を示す大人たちの裏切りに幻滅し、痛憤する」<sup>48)</sup>のであった。ただし、この世代の敗戦に対する反応も疎開体験の有無により異なる。特に学童疎開といった親元を離れる形で疎開をした多くの児童たちは、敗戦の報にやっと親の元に帰れると思ったのである。当時の国民の気持を全体をしてみた場合、安堵と落胆はどちらも本音であり、2つの気持のうちどちらが強かったかというのは程度の差の問題に過ぎないと言えよう。

### 3. 敗戦後の国民の意識

#### 1) 玉音放送直後の言動

放送直後、国民の言動は主に停戦と今後の不安に関するものとして現れた。停戦については徹底抗戦を叫ぶ者や敗戦の実感がしないとする者があった。空襲の激しかった東京においてさえ「広島ノ原子爆弾ニ驚イテ手ヲ拳ゲル様デハ大和民族ノ恥辱ダ。」「甲 今ニナツテ負ケル手ハナイネ。乙 全クダヨ温存主義ナンテ当ニナランヨ。」<sup>49)</sup>といった言動が散見できる。また、国体護持を懸念する発言も認められたがこれは一般に右翼関係や庶民指導層に限られていた。敗戦後の国民の意識は「全般的ニハ本事態ニヨリ招来セラル、<sup>(ママ)</sup>個人生活ノ将来ヲ危惧シ焦躁ツツ」<sup>50)</sup>あった。この生活不安は玉音放送直後の当日から、全国的な預貯金の払戻という形で現れた。この模様を治安当局は「都市方面ニ於ケル(引出の)状況ハ十五日ヨリ十七日ノ間ニ於テ平時ノ三倍乃至十倍ニ達シタ」<sup>51)</sup>とし、農村でもほぼ同様の傾向にあると報告している。この傾向は19日からは「漸時平静ニ復シ」としているが、報告の時点(8月27日)で「貯金ハ平常ヨリ二、三割程度ノ減少」「払戻ノ状況ハ平時ノ一・五倍」<sup>52)</sup>として、依然、引出の傾向のあることが分かる。また大口の引出として軍の預託金の払戻を指摘し「其ノ使途ニ不審ヲ抱ク」とある点が注目される<sup>53)</sup>。

この生活不安と並ぶものが進駐に対する恐怖であった。これは戦争中の「敗戦の結果に対する恐怖」がそのまま転じたものである。当時の国民の間では「異口同音最モ懸念シ居レルハ、婦女子ニ対スル暴行凌辱云々ノ恐怖感ニシテ、次ニ食糧問題」<sup>54)</sup>であった。「婦女子ニ対スル暴行」は「食糧問題」以上に懸念され、「東京ニハ既ニ米兵二十万ガ上陸シタ。上陸シタ米兵ハ日本婦人ヲ妻ニシタソウダ。」<sup>55)</sup>

といった流言蜚語が飛びかい、「早ク外国人相手ノ享楽機関ヲ設ケテ一般婦女子ノ被害ヲナクシテ欲シイ。」<sup>56)</sup>とする発言までが現れた。この外、略奪、虐殺に関することがさかんに言われた。しかし、進駐が進むにつれ、噂で言われていることや戦中の政府の宣伝が全くの嘘であることが分かっていった。

これらの敗戦後の国民の不安感を助長させた要因として、これまで度々引用してきた流言蜚語を挙げる事が出来る。流言蜚語は戦時中から治安当局の取締りにもかかわらず絶えることがなかった。これは軍・政府が極端な言論統制を行ったため、返って情報に対する国民の欲求がアングラ化した結果である。敗戦後、このような言論統制に対し、「何デモ国民ニハ覆面ノ儘ダカラ戦ヒモ敗ケタンダ。」<sup>57)</sup>といった批判が出たが、言論統制はGHQにより解除されるまで続けられていた。国民は政府や新聞の言うことを「何時モ精神的方面(心構)バカリデ一般ニ納得シ得ル様ナコトヲ示サナイ癖ガアル。」<sup>58)</sup>といった風に信用しなくなっていた。こうして敗戦後には「東京デハ反乱軍ガ外務省其ノ他ヲ焼打シテイル。」<sup>59)</sup>「マッカーサーハ母親ガ日本人デ六歳迄奈良デ育ツタ。」<sup>60)</sup>「各地デ朝鮮人が暴動ヲ起シテ居ル。」<sup>61)</sup>「現在ノ紙幣ハ通用シナクナリ今後ハ米軍ノ発行スルモノガ通用スルコトナルダロウ。」<sup>62)</sup>といったあらゆるたぐいの流言が乱れ飛んだ。このため「当局デハ流言ニ迷フナト宣伝シテ居ルガ、我々カラ云ヘバドレガ流言デドレガ真実カ判ナイ場合ガ多イ」<sup>63)</sup>という発言も出てきた。これは当時の殆どの国民にとってもあてはまることであつたと言えよう。

## 2) 諸権威の失墜

戦時体制を支えてきた諸権威は敗戦後、急速に失墜してゆき国民の間には反軍的、反政府的な態度が台頭していった。

例えば『精神』力と国の不敗とに対する信念は、米軍の進駐が進むにつれ国民の前にその物量の豊かさと優れた機械文明を目のあたりにさせていった。こうして、“大和魂”がいかに取るに足らぬものであつたかを知るのである。このような『精神』力とか国の不敗といったことに対する幻滅は、とりもなおさず、国家神道に対する幻滅として現れる。降伏宣言以後、神社への参拝者が急速に減少していった。このような民心の動向を治安当局は「敬神觀念ノ喪失」として次のように報告している。「神社参拝者ハ戦時中ノ約三分ノ一ヨリ場所ニ依ツテハ殆ソド其ノ影ヲ失ヘルガ如キ実状ニアリ。」<sup>64)</sup>「今次敗戦ノ現実ノ前ニ国民ハ『神ヤ仏モナヒ』『神サンナンカ信ジンデモヨイ』等神仏不信ヲ放言」<sup>65)</sup>。

また天皇に対する不敬発言、不敬流言も急速に増加していった。その内容は「国体ノ尊嚴ヲ忘レネバ何年経ツテモ日本ハ駄目ダ」<sup>66)</sup>、「大体日本ノ制度ガ悪イノヤ。天皇陛下トイフモノガアルカラコンナコトナルノヤ。一層ノコト鉄砲デ射チ殺シテシマヘバヨイ」<sup>67)</sup>といった天皇制そのものに対する批判、そして、「国民ノ総意ヲ無視セル停戦デアル、何故徹底的抗戦ヲセヌノダ」<sup>68)</sup>といった停戦を不満とすることからの聖断への批判、「東宮職ガ設置セラレテアルノデ天皇陛下ハ戦争責任者トシテ降下セラレルデアロウ」<sup>69)</sup>といった天皇の戦争責任や皇位に関するものの大体、3種類に大別される。これらのうち、天皇制そのものを批判するものは個人による不敬発言としてのみ記録されており、流

言蜚語としての記録は一切見られない。これはすでに述べてきたように戦後の国民の大多数が天皇制を支持（第2表）していたからであろう。しかし、それにもかかわらず聖断、戦争責任、皇位をめぐる不敬発言、流言は治安当局側に記録されたものだけでも相当の数に登る。戦時中、日本人が戦意の抛り所としていた『精神』力と国の不敗への信念は完全に崩壊し、国家神道と天皇の権威は随分と軽いものになっていったのである。

戦後になり最もその権威と信頼を失なっていたのは軍部である。特に多くの国民から反感と鬱鬱を買ったのが、軍隊における“軍需物質の持出と放出”であった。軍需品の処分については、例えば海軍においては「軍需生産体制ヲ速ニ国民生活安定確保並ニ民力涵養ニ転換スル」<sup>70)</sup>ことを目的として各部遂にその処分についての指令が出されていた。しかし、実際にはこの目的は守られず、「関係官公吏カ所謂『役得』的ニ多量ヲ横取りシテ一般民衆ニハ極少量ノミ配給セル」<sup>71)</sup>「近郷住民ニ在リテハ斯ル情勢ニ乗ジ窃取事犯等頻発スル」<sup>72)</sup>といった事態が全国的に展開していった。こうした軍需物質の無統制な処分は「物質ノ処理問題が巷間話題ノ中心トナリ、○某飛行場附近ノ住民ガ一番甘イコトヲシタ、米デモ砂糖デモ取り放題デアツタソーナ」<sup>73)</sup>といった噂話として国民の間に広まっていた。物質の持出は軍を解除された内地の復員兵の間でもさかに行なわれ、「国民ハ配給量迄ヲ一割天引サレテ何ノ文句ナシニ供出シタ食料ヲ勝手ニ分ケテ取ルトハ余リニモ不都合ダ。」<sup>74)</sup>と一般に軍に対する反感を広めてゆき、「斯様な事ダカラ戦争ニ負ケネバナラナカツタノダ」<sup>75)</sup>とまで言われる様になった。これは、反軍的な態度の増大に止まらず、不正公為を当然視するような傾向をも生み出していくのである。当時の状況からしてこうして持出された軍需物質が闇市に出回ったことは想像に難くない。一般の国民が物不足とインフレに苦しむ一方で、“軍人ト結託シタ御用商人”や軍需工場の上司とその“関係公吏”が闇でうまいことをするという不公平な事態が拡大していくのである。同じ復員でも内地のものが「牛車一台モラヒ夫レニ物ヲ積ンデ」<sup>76)</sup>帰ってくるのに、外地のものは復員の目度すら立たない有様であり、戦後はこうした不公平ばかりが目立っていくのであった。

こうした中、9月11日、戦犯逮捕の際の東条英機元首相の自決未遂に対する反響は、軍の権威失墜を象徴するものであったと言える。「自決シ損ジテ敵ノ手中ニ治療ヲ受ケルガ如キハ武人無情ノ恥辱デアル。寧ロ従容トシテ縛ニ就キ正義日本ノ信念ヲ闡明スベキデアツタ。腰拔ケ武士ノ汚名ヲ残ス丈ケダ。」<sup>77)</sup>といったように、当時の国民は「殆ど悉くが批難攻撃に始終」<sup>78)</sup>していたのである。

敗戦後、国民の政治意識は一般に低調であったが、これは生活に追われていたためと、「敗戦シタ今日、誰ガ大臣ニナツテモ同ジコトダ」<sup>79)</sup>といった政治に対する期待感が失なわれていたためである。東久邇宮内閣に対する反響も、「後継内閣組織ノ『ラヂオ』放送ヲ聞イテ旧勢力ノ強イノニ驚イタ、国民生活ニ余リ関心ヲ持タナイ特権階級ノ偉イ人ダカラ文字通、無条件降伏ノ実績ヲ挙ゲル事ガ出来ルダラウ。」<sup>80)</sup>といった様に国民の目は冷ややかであった。特に閣僚に旧勢力の強いことに失望したとする声が多かった。東久邇宮はその施政演説で敗戦の原因と戦力の実体を明らかにした。これは敗戦感に徹しない観のあった国民にとって降伏という事実を納得させるものであった。これにより「政府並ニ軍部ノ余リニモ無計画ナル秘密主義、頼破リ主義ヲ以テ国民ヲ引摺ツテ来タ」<sup>81)</sup>ことも明らかと

なった。しかし、「全国民総懺悔することが、わが国再建の第一歩であり、わが国内団結の第一歩であると信ずる」<sup>82)</sup>とした所謂「一億総懺悔」の下りは国民に不評であった。「今更民衆＝敗戦責任ヲ論ズルハ不都合ダ。」<sup>83)</sup>「敗戦責任ハ為政者ダ。今後ハ首脳部ノ入替が必要ダ。」<sup>84)</sup>といった声もあがった。また、当時の国民が言う戦争責任とは今日の我々が認識しているような“平和に対する罪”といったものではなく、“負けたことに対する罪”を追求した「敗戦責任」であったことに注意する必要がある。「台湾、満州ノ宝庫ヲ取り上ゲラレルト思フト全ク行先ガ心配デナラン。」<sup>84)</sup>「支那ヤ朝鮮＝威張ラレルノガ癪ダカラ、イツソノコト子供ヲ道連レニ死ンダ方ガマシカモシレナイ。」<sup>85)</sup>といった発言からも分るように、侵略者としての罪の意識は皆無であった。その反面、「軍部辺リノ一部強硬主戦論ヤ外国ヲ知ツタカ振リノ官僚連ガ政府ヲ嫉ケタ仕事ナンダカラ全ク迷惑ヲ蒙ツタノハ一般国民ダヨ」<sup>86)</sup>といった様な被害者意識ばかりが強いのである。そして、「陛下ト国民ハ辞職デキナイカラナー、指導者ナンテ奴等ハ全ク脳ナンダヨ。」<sup>87)</sup>という発言にもある様に、一般に“敗戦責任”を負うべき戦争指導層に天皇は含まれていないのである。

### 3) 敗戦後の国民の生活意識

国民の大多数が戦後は戦中よりはましである（72%；第六表より）としながらも、その現状を悪いものである（82%）と答えている。そして、その不満足の原因に食料不足を第一に挙げているのである（第七表）。食料の不足は戦争末期からのことであったが、戦後はさらに事態が深刻化し大都市では餓死者が出る程であった。特に戦後のインフレは凄じくただでなくとも法外な値のつく闇値は米1

第六表 一九四五年十一月一十二月の満足度<sup>88)</sup>

戦争中より良くなっている。しかし、状態は悪い	54%
戦争中より良く、状態もかなり満足できる	18%
戦争中より悪い。状態も悪い。	17%
戦争中と変わらぬ。状態は悪い。	10%
わからない	1%
合計	100%

第七表 不満足の原因<sup>89)</sup>

食料不足	85%
他の日用品の不足	38%
インフレと闇市（注1）	29%
失業、不十分な賃金、悪い仕事	17%
敗戦の結果による志気の低下	3%
その他（例 農民にとっての肥料の不足）	13%
答えなし	1%
合計	186%

（注1） 都市部の45%の人々はインフレーションと闇市に不満がある。農村部では一般的に食料は得やすい状況にある。

（注2） ほとんどの人々が二つ以上の理由を述べたため、百分率は100%以上となっている。

升(1.4キロ)が17円もした。当時、日雇の日給が10円である<sup>90)</sup>。このため「○野外窃盗(特=野菜盗難、自転車盗難)が増シツツアル事。多額盗難事件(主トシテ現金)カ頻発セルコト」<sup>91)</sup>となり、治安状況が悪化していった。この背景には戦後になり農民が食料の供出を拒否するようになっていたことが挙げられる。アメリカ戦略爆撃調査団の報告書は、「平時における戦意」を人々が日本再建のために働こうとする能力と意欲と定義して、敗戦直後の国民の意識には、このような「『戦意』は、日本においてほとんど存在していなかった」<sup>92)</sup>としている。その理由は共通の目標やリーダーシップが存在していないということと、人々が「個々人の問題に個人的な解決のみ求め、目前の、今日・明日をいかに生きるかという課題のみに関心をもっている」<sup>93)</sup>ということのためとしている。

敗戦後の農民は、先に定義したような意味での働く「戦意」の喪失を典型的に示している。玉音放送の直後、一時的に農民の多くは仕事をやめてしまったことが治安当局の報告にある。農民は「田圃ヘナンカ行クト人が笑フ、此シナ時ニ仕事ヲスル奴ハ馬鹿ダ」<sup>94)</sup>。あるいは、進駐軍による食料掠奪は必至と置いていたため「今ノ中ニ美味イモノヲ喰ツテ置ケ」「喰ヘル丈ケ喰ハネバ損ダ」<sup>95)</sup>といった気風のあることが各地から報告されている。このような傾向は直に「草ヲ見テ手ヲ出サズニハ居ケン、水ガナクテハ見テモ居レン」<sup>96)</sup>といった農民特有の「愛土心」から「働ラク事ヲ天命トスル本来ノ動向」に戻っていく。しかし、戦中、日本の勝利を信じ増産と供出に励んだ多くの農民は、敗戦により今までの努力が無駄なものとなり、戦時の供出米の返還も望むことができなかった。このため自分達が一番馬鹿を見たという気持が強かった。従って農作業に復帰はしたもののその生産意欲は、「我々ハ唯自分ノ家庭ヲ守ル丈ケノ食糧ヲ確保スレバヨイ」「無理シテ作ラズデモ自分ノ飯米ニ事欠キサヘセネバヨイ」<sup>97)</sup>といったように非常に低いものであった。こういった農民の風調は全国的な供出拒否へと発展し、その一方で供出に出すくらいならもっと儲かる闇へ売るといった傾向が増大していった。「戦時中ニ於ケル国家的立場ヨリスル生産意欲ハ、個人本位ノ生産意欲ヘト流動」<sup>98)</sup>していったのである。

こうした勤労意欲の低下は工場の労働者においても見受けられることができる。しかし、その実情は農民とは異なる。敗戦後、軍需工場の全てが生産停止命令により事業の休止を余儀なくされた。これらのうち平和産業への転換がすぐに出来たものは余り多くはなかった。栃木県の例を見ると、県内の712工場の内、民需に一応転換したものが508工場、廃業62工場、今後が未定なもの142工場とあり、転換率は約70%である。しかし、総従業員数103,159人のうち、転換後も就業できた者は33,948人で百分率にしてたったの33%に過ぎない<sup>99)</sup>。ここにさらに軍からの復員が加わるのであるから、戦後の失業問題は非常に深刻なものであった。しかし、そういった就職難にもかかわらず、戦中から事業を継続中の平和産業においても「勤労意欲乏シク其ノ出勤率ハ概ネ六十%程度」<sup>100)</sup>とあり、敗戦直後の国民の志気は相当に低下し“虚脱”の状態にあった。

## おわりに

戦時中の精神力と不敗への信念、そして天皇の信仰は、単に戦意の拠り所としてだけではなく「国

民の心を団結させた絆」でもあった。従って、敗戦直後の戦意の喪失とは共同幻想の喪失であり、虚脱状態とは権威と価値の喪失過程であった。旧勢力の権威の失墜は国民の間に反軍、反政府的な態度を増大させていった。それは特定の方向性を持たない限り、単に人々を利己主義へと傾斜させていくに過ぎないのである。戦後に顕著な欲望の肯定はこの利己主義への傾斜から生まれていくのである。

しかし、国民にとって戦後とは“聖断”により与えられたものであり、決して自らが進んで得たものではない。ここに戦後の壁がある。旧勢力が終戦の意味を国体護持に置いていたのに対して、一般の国民はその戦後の意味を問う術すらなく、その日、その日の生活に追われるばかりであった。少なくとも10月10日政治犯の釈放までは。

#### 注

- 1) 『戦後史の焦点』金原左門編（有斐閣）p. 2.
- 2) 敗戦の意義、戦後の価値を問う議論。
- 3) 日本の降伏が無条件か有条件かを巡る議論。江藤淳が連合国が明示した条件による降伏であるから、無条件降伏ではないと言いつつ出したのが始まり。
- 4) The United States Strategic Bombing Survey (Morale Division), “The Effects of Strategic Bombing on Japanese Morale”, 1947. 尚、同報告書の邦訳については、東京空襲を記録する会『東京大空襲・戦災誌第五巻』（1974）に第3、4、5章の全訳と第6章の抄訳、横浜空襲を記録する会『横浜の空襲と戦災4』（1977）に第1、10章の全訳と、第9章の抄訳、『資料日本現代史2、敗戦直後の政治と社会①』粟屋憲太郎編集大月書店（1980）に第12章の全訳がある。また、横浜での対面調査をした123名のうち録音テープに残された14名の応答が先の『横浜の空襲と戦災4』にある。
- 5) 前掲『横浜の空襲と戦災4』p. 268.
- 6) 前掲『東京大空襲戦災誌第5巻』p. 399.
- 7) 同上 p. 402. 「戦争がすすむにつれあなたは日本が勝つことに疑念を持ち始めたことがありますか。それはいつでしたか。」という質問に対する回答に基づいて作成。
- 8) 同上 p. 403. 「日本は確実な勝利を獲得することはできないと初めて確信したのはいつでしたか。」という質問に対する回答から作成。
- 9) 同上p. 406. 「戦争中、いつか戦争を続けることができないと感じる程度になったことがありますか、それはいつですか。」という質問に対する回答から作製。
- 10) 前掲『横浜の戦災と空襲』p. 269. 米国調査。
- 11) 前掲『資料日本現代史』p. 122. 米国調査。
- 12) 前掲『東京大空襲戦災誌5』p. 411.
- 13) 『横浜の空襲と戦災』p. 327. 回答者男19歳。
- 14) 同上 p. 337. 回答者男20歳。
- 15) 同上 p. 355. 回答者男年齢不詳（独身）。
- 16) 『資料日本現代史2—①』p. 161. 鳥取県警の報告、8月30日。
- 17) 『東京大空襲戦災誌5』p. 412.
- 18) 雑誌『世界』「私の8月15日」女性、終戦当時18歳。
- 19) 『横浜の空襲と戦災』p. 290. 米国調査「宣伝による戦意の統制」。
- 20) 『東京大空襲戦災誌5』p. 409.
- 21) 『戦後の精神史』原敬吾（日本教文社）p. 33.
- 22) 『東京大空襲戦災誌5』p. 409.
- 23) 『横浜の空襲と戦災4』p. 405. 回答者、女年齢不詳。

- 24) 同上 p. 378. 回答者、男46歳。
- 25) 同上 p. 332. 回答者、男19歳。
- 26) 『東京大空襲戦災誌5』p. 409. 「もし日本が負けたら、あなたとあなたの家族がどうなると思いましたか。」という質問に基づく。
- 27) 同上 p. 268. 内務省警保局民心動向の調査。
- 28) 『横浜の空襲と戦災4』p. 338. 回答者男20歳。
- 29) 同上 p. 402. 回答者女年齢不詳。
- 30) 『同上 p. 396. 回答者女年齢不詳(料理店女中)。
- 31) 『東京大空襲戦災誌5』p. 420. 「戦争中お互いに対する国民の態度と行為は変わりましたか」という質問に基づく。
- 32) 同上 p. 416. 「戦争中、全ての種類の国民が同じように苦しんだと思いますか。」という質問に対する回答から。
- 33) 同上 p. 269. 内務省警保局民心動向の調査。
- 34) 同上 p. 278. 警保局による私信検閲。
- 35) 同上。
- 36) 『横浜の空襲と戦災4』p. 270.
- 37) 同上 p. 276.
- 38) 『資料日本現代史2一①』p. 198. 鳥取県警察部長より警保局への報告、9月18日。
- 39) 同上 p. 194. 島根県知事より警保局への報告、9月18日。
- 40) 『日本人と戦争』ロペール・ギラン(根本長兵衛、天野恒雄訳)朝日新聞社 p. 386.
- 41) 同上 p. 386.
- 42) 『資料日本現代史2一①』p. 152. 大阪府からの報告。日付不詳。
- 43) 同上 p. 153. 日付不詳。
- 44) 同上 p. 188. 栃木県警、9月15日。
- 45) 同上 p. 122.
- 46) 同上 p. 152. 日付不詳。
- 47) 『東京大空襲戦災誌5』p. 269.
- 48) 前掲『戦後の精神史』p. 36~p. 37.
- 49) 『資料日本現代史2一①』p. 219. 警視庁情報課「街の声(自8月15日至8月30日)」一般市民の会話を隠密裡に蒐集したもの。
- 50) 同上 p. 138. 高知県知事の報告、8月15日。
- 51) 同上 p. 109. 内務省警保局経済保安課「最近ニ於ケル経済治安情報」8月27日。
- 52) 同上 p. 109. //
- 53) 同上 p. 109. //
- 54) 同上 p. 149. 警視庁「当面ノ問題ニ対スル庶民層ノ動向」8月20日。
- 55) 同上 p. 244. 富山県知事「大詔発後ニ於ケル流言蜚語発生状況ニ関スル件」8月28日。
- 56) 同上 p. 220. 警視庁前掲「街ノ声」9月5日付。進駐軍向け慰安施設設置を内務省は8月18日に各地方長官に指令。27日に最初の施設小町園が大森海岸に開業した。
- 57) 同上 p. 150. 警視庁前掲「庶民層ノ動向」。
- 58) 同上 p. 149. //
- 59) 同上 p. 243. 富山県前掲「流言蜚語発生状況」。
- 60) 同上 p. 250. 鳥取県警「流言ニ関スル件」9月12日。
- 61) 同上 p. 244. 富山県前掲「流言蜚語発生状況」。
- 62) 同上. //

- 63) 同上 p. 151. 警視庁前掲「庶民層ノ動向」。
- 64) 同上 p. 198. 鳥取県警「戦後ニ於ケル民心ノ特異動向ニ関スル件」9月18日。
- 65) 同上 p. 161. 鳥取県警前掲「急変ヲ続ル民心動向」8月30日。
- 66) 同上 p. 247. 滋賀県警「不敬事件及不敬流言等発生状況ニ関スル件」9月7日。
- 67) 同上 p. 252. 大阪府知事「不敬被疑事件発生並検挙ニ関スル件」9月29日。
- 68) 同上 p. 160. 鳥取県警前掲「事局急変ヲ続ル民心動向」8月30日。
- 69) 同上 p. 247. 滞賀県警前掲「不敬流言」。
- 70) 同上 p. 102. 「終戦時（自八月十四日細九月二日）ニ於ケル軍需品処分ニ関スル中央ヨリノ令達覚（二一、一、二九第二復員省総務局）引用文の発令日付は8月15日とある。
- 71) 同上 p. 113. 憲兵司令部「軍秩輯報」9月3日。
- 72) 同上 p. 114. 内務省警保局経済保安課「軍物質放出状況」9月24日。
- 73) 同上 p. 194. 島根県知事前掲「民心ノ動向」。
- 74) 同上 p. 163. 大分県警「重大発表後ニ於ケル民心ノ動向ニ関スル件」9月2日。
- 75) 同上 p. 195. 島根県知事前掲「民心ノ動向」。
- 76) 同上 p. 234. 警視庁前掲「街ノ声」9月25日。
- 77) 同上 p. 355. 鳥取県警「東条大将自決ニ対スル部民ノ意嚮ニ関スル件」9月16日。
- 78) 同上 p. 344. 「戦争犯罪人の発表並東条元首の自殺未遂に対する反響」警保局、日付不詳。
- 79) 同上 p. 256. 徳島県知事「新内閣成立ニ対スル反響ニ関スル件」8月19日。
- 80) 同上 p. 223. 警視庁前掲「街ノ声」9月5日。
- 81) 同上 p. 261. 警視庁「首相宮施政御演説ニ対スル庶民指導層ノ意嚮」9月7日。
- 82) 『昭和の歴史第8巻占領と民主主義』神田文人（小学館）p. 41.
- 83) 『資料日本現代史2—①』p. 178. 佐賀県知事「終戦後ニ於ケル部民ノ言動ニ関スル件」9月11日付。
- 84) 同上 p. 225. 警視庁前掲「街ノ声」9月25日。
- 85) 同上 p. 223. “ “ 9月5日。
- 86) 同上 p. 223. “ “ 9月25日。
- 87) 同上 p. 233. “ “ “
- 88) 同上 p. 124. 米国戦略爆撃調査団による。
- 89) 同上 p. 124.
- 90) 『昭和世相史』岩崎爾郎、加藤秀俊共編（社会思想社）、東京や大都市部でのヤミ値はこれを上回ることもあった。
- 91) 『資料日本現代史2—②』p. 196. 島根県知事前掲「民心ノ動向」。
- 92) 同上 p. 121. 「敗戦直後の国民意識」。
- 93) 同上 p. 121. “ “
- 94) 同上 p. 386. 岐阜県知事「戦争終結ト農民ノ動向ニ関スル件」8月31日。
- 95) 同上 p. 413. 愛媛県「生産供出ヲ続ル農民等ノ思想動向ニ関スル件」日付不詳。
- 96) 同上 p. 386. 岐阜県知事前掲「農民ノ動向」。
- 97) 同上 p. 394. 福岡県知事「戦争終結後ニ於ケル農民ノ動向ニ関スル件」9月17日。
- 98) 同上 p. 394. “ “ “
- 99) 同上 p. 171. 栃木県知事「戦争終結ニ伴フ国民生活安定ニ関スル件」9月6日。
- 100) 同上 p. 111. 内務省警保局経済保安課「最近ニ於ケル経済治安情勢」8月27日。